

氏 名	林 春
学位の専攻分野の名称	博士（言語コミュニケーション文化）
学位記番号	甲言第14号（文部科学省への報告番号甲第500号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2014年2月22日
学位論文題目	<b>現代日本語の副詞的修飾成分の学習に関する研究 －中国語母語話者の日本語学習者を対象に－</b>
論文審査委員	（主査）教授 于 康 （副査）教授 神 崎 高明 教授 大 高 博 美 村 木 新次郎（同志社女子大学大学院特認教授）

## 論文内容の要旨

林春氏の学位申請論文は、「現代日本語の副詞的修飾成分の学習に関する研究－中国語母語話者の日本語学習者を対象に－」と題して、中国語母語話者の日本語学習者の作文データを用い、学習者の副詞的修飾成分の使用実態（誤用と正用を含めて）の記述と学習難易度の解明を目的としている。

本論文は、7章から構成されている。

「第1章 序論」は、研究の動機、目的、方法、研究の対象、論文の構成を中心に述べるものである。研究の対象を明確にした上で、研究の目的と方法を明示し、研究の土台でもある主な用語やその用語の定義について丁寧に定義し、用例の出典も説明している。

「第2章 先行研究の概観」は、日本語学研究と日本語教育研究の両サイドから副詞と副詞的修飾成分に関する先行研究や副詞的修飾成分の習得に関する先行研究を解析し、未解決の問題点を指摘するものである。

「第3章 時間関係の副詞的修飾成分の誤用分析」と「第4章 程度量の副詞的修飾成分の誤用」は、副詞的修飾成分の誤用の類型や誤用の要因を明らかにするものである。それに対し、「第5章 頻度の副詞的修飾成分の学習難易度」と「第6章 様態の副詞的修飾成分の学習難易度」は、副詞的修飾成分の学習難易度を明らかにするものである。

第3章は、主に時間関係を表す副詞的修飾成分を、第4章は、主に程度量を表す副詞的修飾成分を研究の対象とし、それぞれの誤用例の統計・分析を行ったうえで、誤用のパターン、誤用の順位、誤用の傾向性、誤用の要因を明らかにするものである。

第5章は、頻度を表す副詞的修飾成分の誤用文・正用文を横断的に統計・分析し、中国語母語話者の日本語学習者が産出した頻度を表す副詞的修飾成分の誤用の類型と誤用の傾向性を明らかにした上で、学習難易度のメカニズムの究明を試みるものである。日本語教科書における頻度を表す副詞的修飾成分の導入順序・出現頻度と比較しながら、学習難易度に関わる要因についても検討している。

第6章は、様態を表す副詞的修飾成分の誤用文・正用文を統計・分析し、中国語母語話者の日本語学習者が産出した様態を表す副詞的修飾成分の誤用の類型と誤用の傾向性を明らかにした上で、学習難易度のメカニズムの究明を試みるものである。教科書における様態を表す副詞的修飾成分の出現順序や出現頻度と学習難易度を比較しながら、教科書や日本語教育における様態を表す副詞的修飾成分の課題の分析も行う。

第7章は、本研究のまとめ、日本語教育への提案、本研究の意義および今後の課題などについて述べるものである。

## 論文審査結果の要旨

林春氏の学位申請論文は、中国語母語話者の日本語学習者の作文データを対象に、日本語教育における副詞的修飾成分の学習と教育という立場に立ち、誤用の分析を踏まえた上で誤用のメカニズムを明らかにしようとするものである。

本研究の最大の特徴は、大規模な日本語学習者のコーパスのデータを用い、学習者の副詞的修飾成分の使用実態を明らかにしたうえで、第二言語習得の視点から誤用のメカニズムを明らかにすることである。以下において、本論文のオリジナリティと独創性を中心に審査の結果をまとめてご報告申し上げます。

### 1. 先行研究に関する体系的研究

品詞分類上の「副詞」と構文における「副詞的修飾成分」とは、一見すれば似通ったものであるが、実際には次元が異なるものである。これまでの研究では、構文レベルの「副詞的修飾成分」のことを「副詞」と呼んだり、品詞レベルの「副詞」を構文レベルのものとして使ったりする現象はよく見られる。従って、品詞レベルの「副詞」と構文レベルの「副詞的修飾成分」の体系的な研究が求められており、それぞれの問題点を指摘した上で、本研究のターゲットを明確にする必要がある。要するに、用語の定義と分類は、副詞的修飾成分の学習や教育に直接かかわっているのである。

本研究では、日本語学における「副詞」や「副詞的修飾成分」に関する研究について、主に、山田（1908）、松下（1930）、橋本（1934）、時枝（1950）、渡辺（1971）、市川（1976）、中右（1980）、北原（1981）、矢澤（1983）、益岡・田窪（1992）、仁田（1993、2002、2009）を取りあげ、それぞれの特徴と問題点を明らかにしている。本論では、副詞的修飾成分をモダリティ修飾成分と命題内修飾成分に分け、命題内修飾成分は、更に様態の副詞的修飾成分、結果の副詞的修飾成分、程度量の副詞的修飾成分、頻度の副詞的修飾成分と時間関係の副詞的修飾成分に分けている。

副詞的修飾成分の習得研究に関しては、主に小矢野（1983）、石黒（2004）、王（2005、2006）、遠藤（2007）、張（2009）、渡辺（2010）、李（2010）、李（2011）を取りあげている。本論では、王（2004、2005）と張（2009）で中国語母語話者の陳述副詞の習得問題を研究しているのに対して、他の副詞（程度副詞、情態副詞）の習得問題には触れていないことを指摘している。陳述副詞の習得状況の調査のために、王（2004、2005）と張（2009）はアンケート調査を行っているが、その調査の結果が中国語母語話者の習得状況を反映しているとは言いがたい。小林（1988）は副用語の誤用研究をしているが、個々の誤用を指摘するのにとどまり、その分析にまで深く立ち入ることはできておらず、誤用の要因についての分析も行われていない。

要するに、今までの副詞的修飾成分の習得に関する研究は次のような課題が残されている。（1）従来の研究では、学習者の品詞分類としての副詞の誤用を中心に分析したものが殆どで（例えば、王2004、2005、張2009、小林1988など）、文の構成要素としての副詞的修飾成分の誤用に関する研究はほとんど見られない。しかし、学習者の誤用実態を把握するためには、品詞としての副詞の誤用だけでなく、副詞的修飾成分についての誤用の類型と誤用が生じる要因を明らかにしなければならない。（2）アンケート調査によるこれまでの研究では、説得力のある一般化を提出するのは困難である。大規模のコーパスから誤用文について統計・分析を行い、その中から規則性を見いださなければ、パターン化することはできない。（3）学習者の副詞的修飾成分に関する学習難易度の研究があまり見られない。学習の難易度を明らかにしなければ、日本語教科書における副詞的修飾成分の導入の数や順番、学習のプロセスなどは恣意的なものになる恐れがある。

膨大な先行研究があるものの、本論文の整理は、非常に的を射たものであり、これまでの「副詞」と「副詞的修飾成分」における議論が混同しているという現状を打破し、問題点を的確に指摘し、明確な研究の土台を構築することに成功したと考えられる。

## 2. 副詞的修飾成分の誤用の類型や誤用の要因の指摘

副詞的修飾成分の誤用の類型や誤用の要因のメカニズムを明らかにするため、時間関係を表す副詞的修飾成分と程度量を表す副詞的修飾成分を例として取りあげ、細部まで考察を行っている。

時間関係や程度量を表す副詞的修飾成分の誤用の類型は大きく分けると、いずれも「\*X→副詞的修飾成分」（「X型」と略す）と「\*副詞的修飾成分→Y」（「Y型」と略す）のような2種類がある。

しかし、「X型」の誤用の順位と「Y型」の誤用の順位は、時間関係を表す副詞的修飾成分と程度量を表す副詞的修飾成分と必ずしも同じではない。

「X型」の誤用の順位は、時間関係を表す副詞的修飾成分においては、「\*○→時間関係の副詞」>「\*N→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*NP+助詞→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*NP→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*その他→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*副詞的修飾成分+助詞→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*形容詞→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*接続詞→時間関係の副詞的修飾成分」であるのに対し、程度量を表す副詞的修飾成分においては、「\*形容詞→程度量の副詞的修飾成分」>「\*その他→程度量の副詞的修飾成分」>「\*副詞的修飾成分+助詞→程度量の副詞的修飾成分」>「\*連体修飾成分→程度量の副詞的修飾成分」>「\*○→程度量の副詞的修飾成分」である。

「Y型」の誤用の順位は、時間関係を表す副詞的修飾成分においては、「\*時間関係の副詞的修飾成分→過去を表す時間関係の副詞的修飾成分」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→時間関係の副詞的修飾成分」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→○」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→頻度の副詞的修飾成分」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→現在を表す時間関係の副詞的修飾成分」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→将来を表す時間関係の副詞的修飾成分」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→接続詞」>「\*時間関係の副詞的修飾成分→程度量の副詞的修飾成分」であるのに対し、程度量を表す副詞的修飾成分においては、「\*程度量の副詞的修飾成分→程度量の副詞的修飾成分」>「\*程度量の副詞的修飾成分→○」>「\*程度量の副詞的修飾成分→連体修飾成分」>「\*程度量の副詞的修飾成分→頻度の副詞的修飾成分」である。

順位における時間関係を表す副詞的修飾成分と程度量を表す副詞的修飾成分の分布からもわかるように、中国語母語話者の日本語学習者にとって、程度量を表す副詞的修飾成分より、時間関係を表す副詞的修飾成分の方が学習しにくい。

誤用の要因は学習者の文法知識の欠如、母語の負の転移、過剰般化に起因するものが多いと言われている。

しかし、「X型」の場合は、時間関係を表す副詞的修飾成分においては、①母語の負の転移、②副詞の意味とその共起制限に関する知識の欠如、③学習者の期間を表す名詞の直後に無助詞で用いられることに対し認識の欠如や過剰般化や母語の負の転移などの複合的な要因によるものがよく観察されるのに対し、程度量を表す副詞的修飾成分においては、①学習者の文法知識の欠如、②学習者の母語での「置き換えのストラテジー」、③過剰般化および「母語の語彙の置き換えのストラテジー」④過剰般化、⑤母語の負の転移および過剰般化、⑥「母語の文法規則の転移」によるものがよく観察される。一方、「Y型」の場合は、時間関係を表す副詞的修飾成分においては、①時間副詞の意味とその共起制限に関する知識の欠如、②学習者の副詞が表す意味やニュアンスや使い方に対する認識の欠如や母語の負の転移や教科書の説明の不足や学習者が時間副詞の意味とその共起成分に関する知識の欠如、発音の聞き分けの混乱という複合的な要因によるものが顕著であるのに対し、程度量を表す副詞的修飾成分においては、①文体の使い分けに関する知識の欠如、②母語の負の転移と文体の違いに関する知識の欠如、③日本語教科書の単語の使い方に対する説明が不足とい

う複合的な要因、④類義語の意味・使い分けに対する認識の欠如によるものが顕著である。

要するに、誤用は、それぞれ学習者の文法知識の欠如、母語の負の転移、過剰般化に起因するものはあるものの、それだけではなく、文法知識の欠如と母語の負の転移、または母語の負の転移と過剰般化が絡むことによって、複合型の誤用も存在しているのである。

副詞的修飾成分の誤用の類型や誤用の要因の指摘に関して、複合型の誤用があるという指摘は、これまでに証明されていなかったものであるために、学術的貢献度が高いと評価できる。

### 3. 副詞的修飾成分の学習難易度の究明の試み

副詞的修飾成分の学習難易度の究明は日本語教育においても非常に重要な課題であると同時に非常に難しい課題でもある。学習難易度の究明は労力を要するだけでなく、莫大なデータを丁寧に集計し分析してはじめて一定の説明力のある仮説を立てることができるようになるので、いままで、ほとんど看過されてきた。

本論文は、あえてこの難しい課題に果敢に挑戦し、頻度を表す副詞的修飾成分と様態を表す副詞的修飾成

易 ← → 難					
I	II	III			IV
		III-1	III-2	III-3	
よく、また	毎日、いつも	常に、一度、何度も、時々、日々、もう一度、～回、何回も、絶えず	年々、毎年、たまに（は）、めったに…ない、毎週、しばしば、頻繁に、毎朝	いったん、ふたたび、何度か、再度	毎回、まれに、始終、時折、たまたま、毎度

図1 頻度を表す副詞的修飾成分の学習難易度

易 ← → 難					
I	II	III			IV
		III-1	III-2	III-3	
一緒に、一生懸命	きちんと、しっかり（と）、大切に、早く、真剣に、積極的に、強く、楽しく、幸せに、ゆっくりと	直接、順調に、大事に、自由に、上手に、正直に、思わず、すつかり、一気に、容易に	ひたすら、真面目に、喜んで、次々と、徹底的に、軽く、必死に、静かに、熱心に、はっきり（と）、広く、持続的に、自然に、しみじみ（と）、優しく、精一杯、慌てて、のんびり、極端に、正しく	詳しく、相変わらず、変わらず、バリバリと、自発的に、平気で、無意識に、無事、寂しく、じっくり、ぱっと、急いで、厳しく、慎重に、細かく、生き生きと、冷静に	偶然、激しく、無理に、無償で、きつく、ぐるぐる、こそこそ、すばやく、てきぱきと、つつさに、ぼんやり、長々と、喜んで、おとなしく、即座に、大きな声で、堂々と

図2 様態を表す副詞的修飾成分の学習難易度



分を例に取りあげ、それぞれの学習難易度の究明を試みた。

その結果、中国語母語話者の日本語学習者に見られる頻度を表す副詞的修飾成分と様態を表す副詞的修飾成分の学習難易度の究明に成功したと言える。図1は、頻度を表す副詞的修飾成分の学習難易度をまとめたものであり、図2は様態を表す副詞的修飾成分の学習難易度をまとめたものである。

#### 4. 日本語教科書における副詞的修飾成分の使用実態の究明

学習難易度を明らかにすることは、日本語教科書の編纂や日本語教育に生かすことも目的の1つであるため、現在中国で使われている代表的な日本語の教科書における副詞的修飾成分の導入現状を明確にする必要がある。しかし、これまでの研究では、日本語の教科書に使われている副詞的修飾成分についての調査はほとんど行われていない。

本論文は、中国でよく使用されている日本語の教科書《基础日语教程》（第1冊～第4冊旅游教育出版社2005）を対象に、副詞的修飾成分の導入現状を明らかにし、主に次のような結果が得られた。①第1冊から第4冊までの副詞的修飾成分の異なり語数と出現回数はばらばらで、バランスが取れていない。②作文に見られる学習者が産出した数多くの副詞的修飾成分は教科書の中にはない。③教科書に現れている副詞的修飾成分の多くは学習者の作文には使用されていない。④教科書の副詞的修飾成分の提出の順序は学習難易度が低いものから高いものという順ではない。

本論文は、副詞的修飾成分の誤用の類型、誤用の順位、誤用の傾向性、誤用の要因、学習難易度を明らかにした上で、日本語教科書における副詞的修飾成分の導入順序・出現頻度と比較しながら日本語の教科書の編纂や日本語教育への提案を試みている。この試みについては、審査員一同が高く評価している。前例を見ない試みであり、特に日本語教育においては、このような研究が非常に重要でかつ必要であるので、先駆的研究であると言えよう。使用されているデータは豊富で、論証も綿密であり、結論が首肯できるものである。本研究は、日本語の副詞的修飾成分の研究だけではなく、日本語教育研究全体に大きな影響を与えるであろう。

このように、林春氏の学位申請論文は極めて高い学術内容を持つものであるが、問題点が一切ないというわけではない。たとえば、誤用例の容認度や考察対象のバランス、特に見いだした結果と一般化との関係については、更に掘り下げる必要があるだろう。これらの問題点は、今後の課題となるが、本論の博士学位請求論文としての価値を損なうものでは決してない。

以上、審査員4名は林春氏の論文を慎重に審査し、2014年1月15日に行った口頭試問の結果を併せて協議した結果、林春氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するに相応しいものであると判断するに至り、ここに報告するものである。